

高畠遺跡詳細分布調査報告書

1984年3月

安来市教育委員会

序

高畠遺跡詳細分布調査は、昭和57・58年の2ヶ年に亘り、実施をした。今回の分布調査は須恵器の窯跡を中心とした、遺跡の範囲確認であった。そのため、昭和57年度は奈良国立文化財研究所の協力を得て、プロトン磁力計による窯跡探査を実施した。昭和58年度はこの磁力計の探査結果に基づき、窯跡の所在を明確にすべく、数ヶ所の小トレンチを設定して発掘調査を実施した。その結果、窯の本体にあたる窯体を検出することはできなかったが、焼口を検出でき、窯の位置が明確になるなど貴重な資料を得ることができた。

また、周辺の分布調査も実施し、十分なものではないが、周知の遺跡などについて、時期及び性格を明確にすることことができた。

埋蔵文化財の保護は、常に開発との関連で取りざたされる。それは、やはり分布調査が不徹底であることに起因している。そのため今後とも、高畠窯跡を中心とした、この地域について、日常的に調査を続けていく所存であり、関係各位には今後とも絶大なる御協力を得られますようお願い致します。

例　　言

1. 調査は、安来市教育委員会が、国庫補助を得、昭和57・58年の2カ年に渡り実施した。
2. 調査地点は、島根県安来市門生町地内で、調査組織は、下記のとおりである。

事務局　社会教育課

体育文化係

広江奈智雄（主事）

調査指導　山本　清（島根大学名誉教授）

田中　義照（島根大学教授）

西村　康（奈良国立文化財研究所）

野津　弘雄（安来市文化財保護委員）

大森　隆雄（島根県文化財保護指導員）

ト部　古博（島根県教育委員会）

（順不同）

3. 遺物整理は、吉田里子、岩佐美津江、原田奈生子、原裕司、大谷見二、横原充昭、永島和広、沢田陽、長妻久康、丹波英史、大島尚美、野崎史子、湯浅政志・加藤秀芳・永見英（安来市教育委員会嘱託）が行い、またトレースは、吉田、岩佐、原、沢田、野崎、永見が行った。
4. 写真撮影は、永島・永見が行った。
5. 本文の執筆および編集は永見が担当した。
6. 本書の方針は全て磁北を示す。
7. 高畠遺跡の遺物は、安来市教育委員会が保存している。

（敬称略）

高畠遺跡日誌抄

- 昭和58年12月12日 草刈
13日 草刈及び標高移動
15日 1.2トレンチ発掘調査
16日 同上
20日 同上、なお暗褐色土層検出。（灰原）
- 昭和59年1月10日 雪のため発掘調査が遅れる。第3トレンチ設定して発掘調査を開始。
1月11日 4.5トレンチ設定、3トレンチより焚口検出。奈良国立文化研究所より西村康氏調査指導。
12日 3トレンチ完掘、ローリングタワー組み立てする。
13日 再び1.2トレンチ発掘。
19日 3トレンチ写真取り、1.2トレンチ発掘。
20日 ポーリング調査の為の杭打ち
1月23日 1.2トレンチ写真とポーリング調査の為の杭打ち
24日 1.2.3トレンチの断面図作成。
3月5日 地形測量が不充分な為に測量を再実施。
6日 同上
7日 同上
8日 同上、測量は終りとする。
15日 ポーリング調査
26日 6トレンチ埋め戻し。
3月27日 1.2.3トレンチ埋め戻し。
28日 同上、調査終了

調査概要

昭和58年度高畠遺跡分布調査は昭和57年度のプロトン磁力計調査に基づき、「高畠遺跡」のうち、高畠1地区とした部分について発掘調査を実施した。トレントチは、a、c～d及び、西村康氏の指摘された部分など、6ヶ所を設定した。

また、プロトン磁力計調査によりbとされた部分については、トレントチは設定せず、すぐ下の部分が削られていた部分があったため、そこを清掃することで確認した。結果は、須恵器ではなく黄褐色の土層が確認できた。この土層は下層である明褐色土層の風化土と考えられ、やはり地山と考えても良いものである。この部分について、遺跡に付属する施設はないことが明確となった。

1.2 トレントチ

1・2 トレントチは、プロトン磁力計調査においては、dと指摘された部分にあたる。この部分について、 $1\text{m} \times 8.4\text{m}$ のトレントチを設定した。この部分は窯の灰原の部分であると考えられ、表土より約145cmの部分にⅣ層の黒色土が確認される。1トレントチPaより4.15mの所でこの土層はなくなる。池側に肩状に広がるものである。厚さは約50cmを測る。1トレントチから南へ延びる。その範囲については不明確である。土器はⅠ層の暗青灰色土層から灰原と考えられるⅣ層からも出土する。Ⅲ層の暗褐色土層はPaより約2mの部分が最も高くなっている。

3 トレントチ

3 トレントチは地形的に見た場合の傾斜の変換する部分である。この部分について、 $1\text{m} \times 8.6\text{m}$ のトレントチを設定した。この部分からは焚口が検出された。この焚口の両側は炭化物を含む土層があり須恵器も含まれている。この土層は焚口に切られていることより、焚口が検出された窯跡は最も古いものではなく、周辺に別な窯の存在を示すものと考えられる。

4 トレントチ

4 トレントチは、プロトン磁力計調査によるCとされた部分である。この部分について、 $1\text{m} \times 3\text{m}$ のトレントチを設定した。表土より約25cm下に地山が検出されたため、窯跡が所在しないことが明確となった。

5 トレントチ

5 トレントチは、プロトン磁力計調査によりaとされ

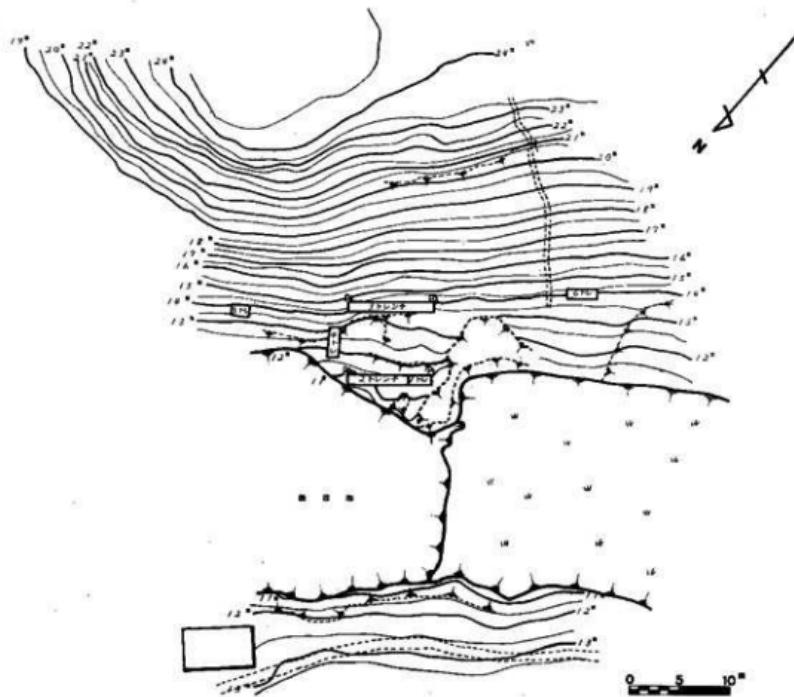


図1 高畠遺跡位置図

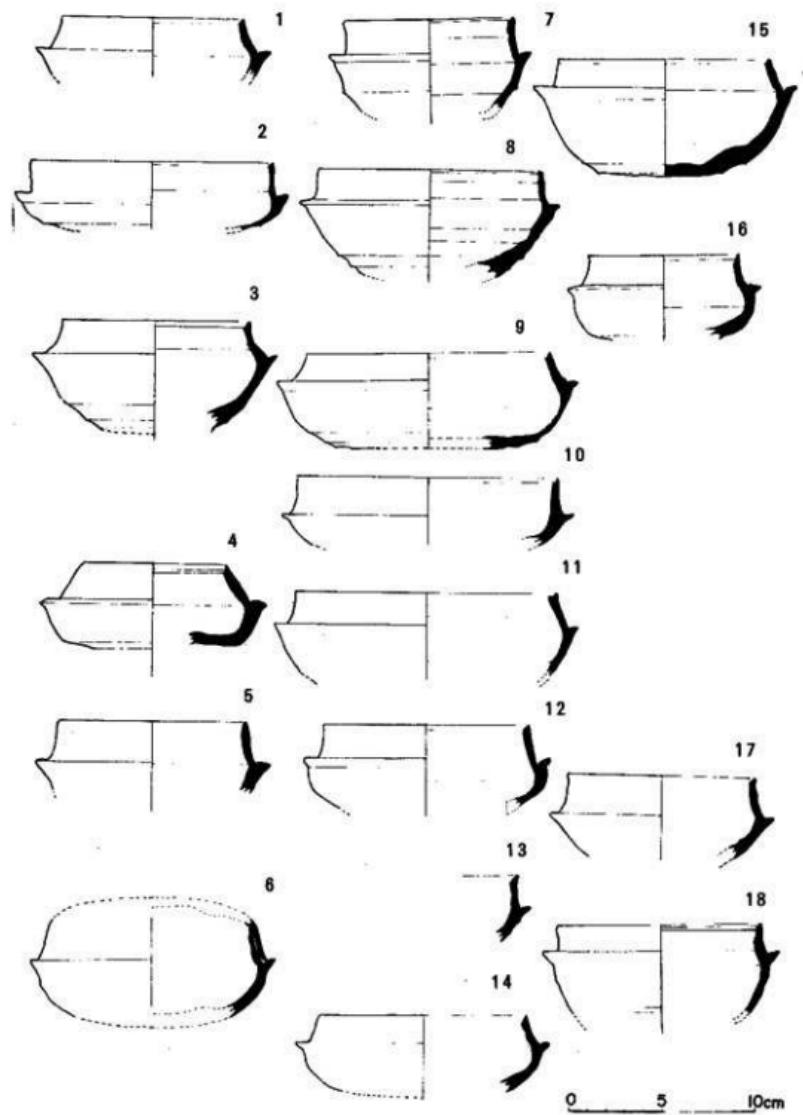
た部分である。この部分については $1\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを設定した。表土より約25cmに地山を検出した。このことよりこの部分については窯のないことが明確となった。

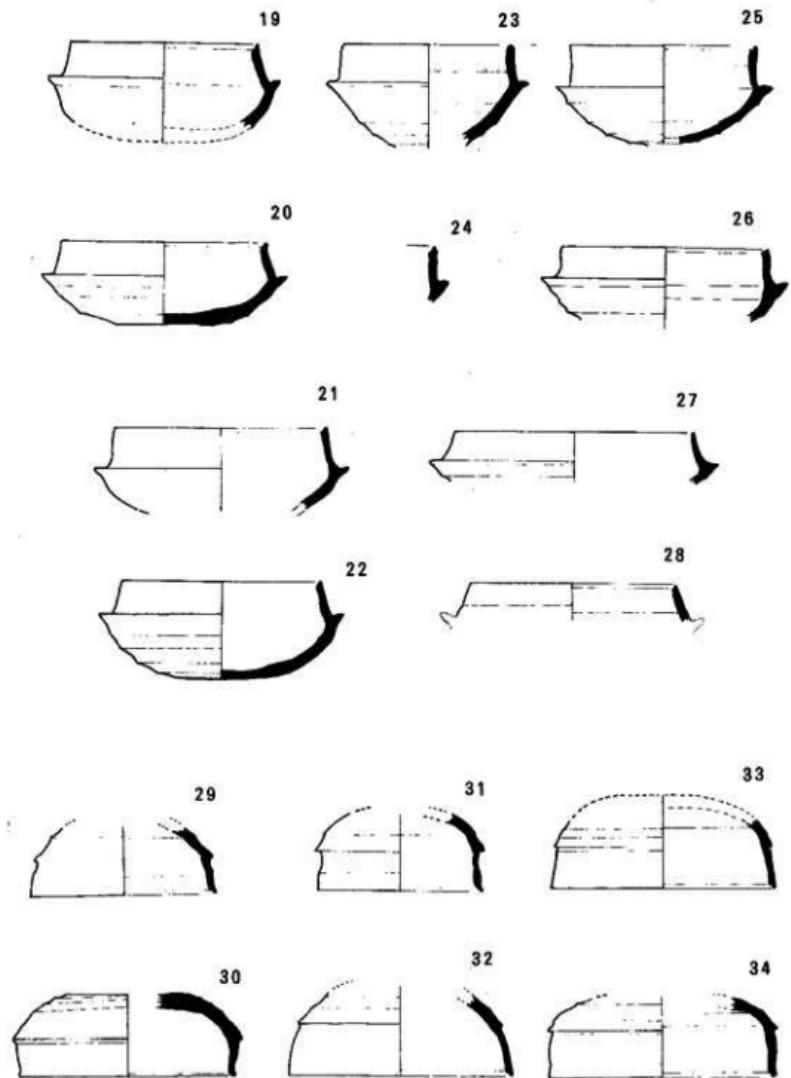
6 トレンチ

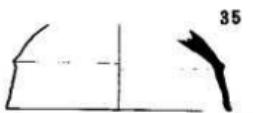
6 トレンチは、昭和57年度のプロトン磁力計調査を基に、西村康氏の指摘により、 $1\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを設定した。この部分には灰を含み、やや黒色を呈する土層がⅢ層に検出された。しかし、大きな炭化物の出土がないことにより、焚口とは考えられない。



地形測量図







35



42



36



43



37



44



38



45



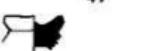
39



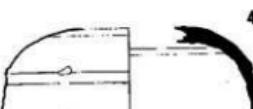
46



40



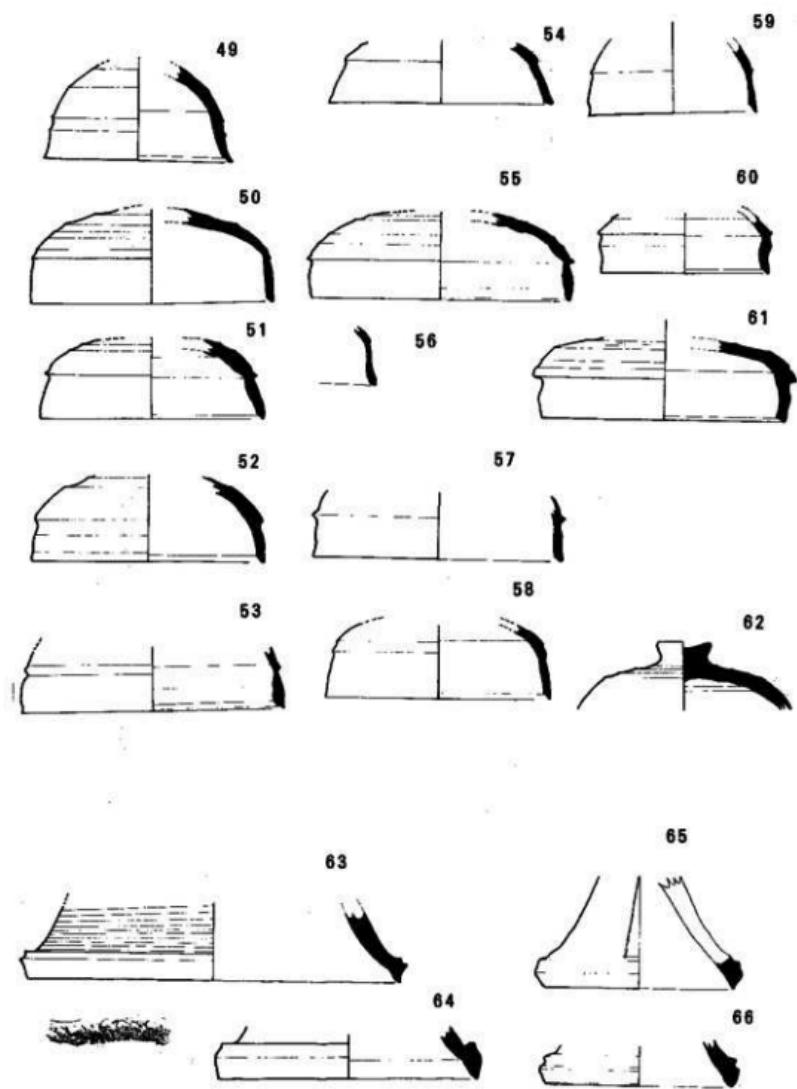
47

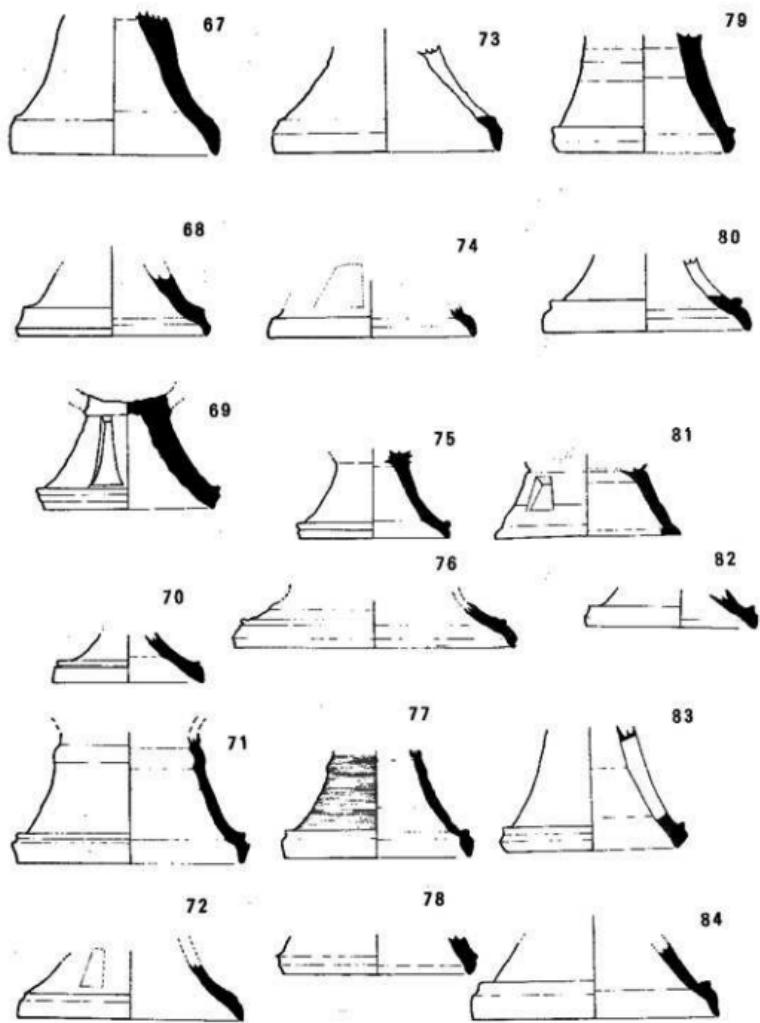


41



48







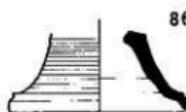
85



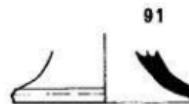
90



95



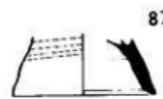
86



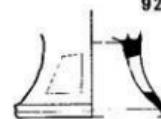
91



96



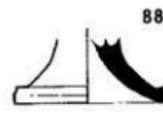
87



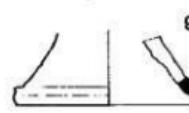
92



97



88



93



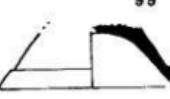
98



89



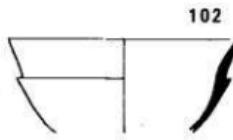
94



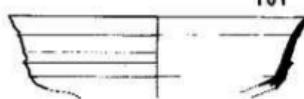
99



100



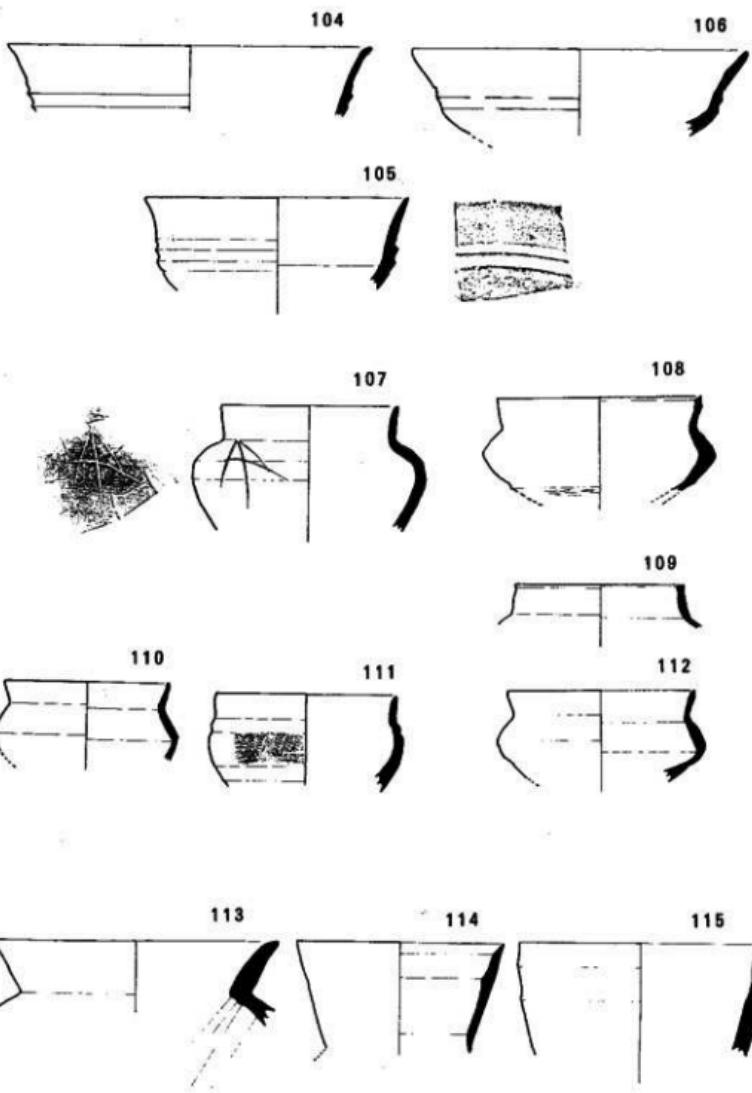
102

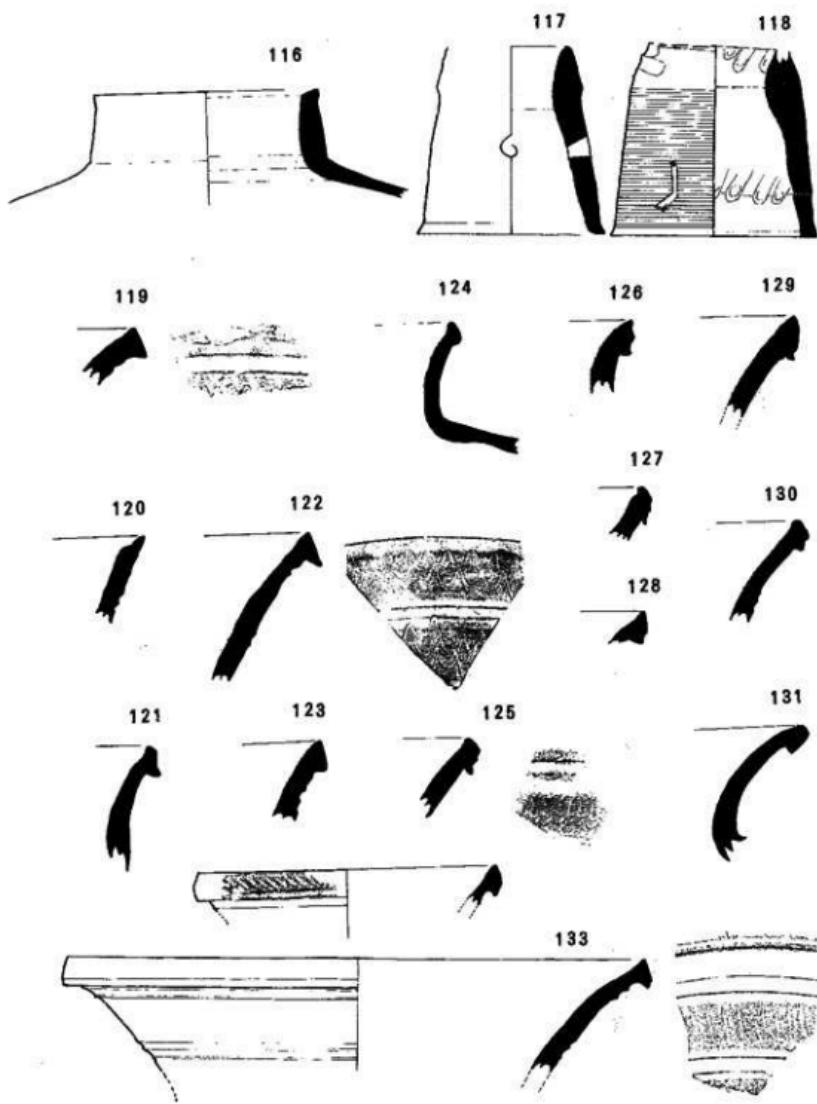


101



103









高畠 1 地区（高畠窯跡）近景



灰原 須恵器 出土状況



焚口付近検出状況



焚口付近が検出された
3 トレンチ